

第1回：地名の会の紹介 村岡の名前の由来 発展の推移(除く古代・中世)

藤沢地名の会の紹介をさせていただきます。

「藤沢地名の会」は今年で丁度 35 年目です。もともと市が日本地名研究所と云う所に頼んで地名を調査しましたが、その時多くの市民が参加し、終って有志がこの会を作りました。今 170 名ぐらいの会員です。

調査の結果が「藤沢の地名」という本になり我々のバイブルと云えます。

地名を通して郷土を知ろうと云うことで、一般の方々にも参加を呼びかけ、講演会や映画会、そして市内を約5年で一巡する「地名探訪」を行い、村岡なども一緒に歩くわけです。又会員向けには「県内を歩く会」や「古文書」「地誌輪読会」などの勉強会もあります。

（研究会ではなく、役員に専門家は一人も居ないし、名前の割には親しみ易い会と云われています。よろしくお願ひします。）

まず村岡の地名の由来についてですが、

「わが住む村」という本に、「村岡という地名は、重なり合う岡の群れから成立っている、この村の地勢をよく表わしていると思います。」とあり、村岡に住んでいた山川菊栄が戦時中に書いた文で、地名の由来としてよく引用されています。昭和11年に村岡に来て、うずら園を開きました。ご主人とともに社会主義者で、言論統制もあり、生活のため卵を売っていたわけです。三越に持って行ったりしています。執筆もその中で、「古老を、こまめに訪ね歩き」、当時の様子を「聞いたままの言葉」で記録した立派な村岡の民俗誌となっています。

（戦後片山内閣の時、労働省婦人少年局の初代局長となっています。片山さんは藤沢市の名誉市民第一号の方です。）

ところで、村岡を開いたのは「村岡五郎 平良文^{よしぶみ}」であると云われています。桓武平氏の一族で、平安時代の中頃、平将門の乱の平定に功績を挙げ、関東八平氏の祖とされていますが、実は藤沢以外に埼玉県^{くまがや}の熊谷と茨城県^{しもつま}の下妻の二ヶ所で、何れも「村岡」と云うところに住んでいたことがあると言われます。もし、その内のどこかで、村岡五郎の名がついたとすれば、他の村岡は人の名前が地名になった珍しいケースかもしれません、面白い事と云えます。（だいたい地名が先にあり人名があとに付けられるのが普通と云えますから）

それでは、村岡の発展の歩みを見てみます。

「重なり合う岡のむれ」のような表現の出来る村は、藤沢ではここだけです。地形的に村岡は、はるか多摩丘陵の南端とされ、今から約13万年前の温暖期の海進の後、陸地化した所で、古い分、山が削られ深い谷戸が出来ました。藤沢の大部分は新しい砂丘地帯と、相模野台地で平坦です。又片瀬丘陵は三浦半島の西端とされ、その基板は、約350万年前の池子層、村岡は少し新しく約200万年前の浦郷層と云われ、何れも鎌倉石の産地でした。

村岡には約12千年前からの遺跡があり、また川名の丘陵には奈良時代までの横穴墳墓跡が多くあり有名です。

（歴史の始まる平安時代から中世にかけて、村岡は武士の活躍の舞台となりましたが、是は次回にお話しします。）

村岡の地名は鎌倉時代初期に「村岡郷」とあるのが古い記録です。江戸時代には「渡内・高谷・小塚・弥勒寺・宮前」に分かれ「村岡郷五箇村」と呼ばれました。幕末には、黒船に備え、彦根藩、熊本藩、佐倉藩などの預け地となり、人足の負担などに苦勞しました。今の村岡は、江戸時代を通じて160戸程の戸数で余り変っていません。

明治22年に五箇村と柄沢・川名が合併し「鎌倉郡村岡村」が生まれました。高谷・小塚・弥勒寺は東も西も尾根に挟まれ、畑に行くのにも山を越え、明治20年開通の東海道線も尾根筋を分断して通されました。

川名は柏尾川の南にありますが、今一番自然の残っているのが川名の清水谷戸で、藤沢三大谷戸の一つです。

前回オリンピック用に計画され、今、川名まで開通した県道312号線の予定地のため自然が残された所です。

柏尾川の昔は、^{あば}暴れ川で、川沿いに広がる^{あば}氾濫地帯をコーチ、耕す地または河の内と書きますが、^{まえ}前河内、^{うしろ}後河内など五箇村の主要な畑とされました。大正時代前期の河川改修で、やっと川筋が安定しました。

昭和16年藤沢市と合併し、当時の人口は2千人ほどでした。

昭和34年から始まった村岡の開発は、平成30年柄沢の完了で略一段落しました。また柏尾川流域は工場用地となり昭和36年神戸製鋼、38年には武田薬品などが操業を開始しています。

人口は今、市と合併以来、約14倍の31千人です。その間の藤沢市同地区の人口増加率はその半分ほどです。

重なり合う岡の群れは全く様子を変え、市内で最も地形が変わった所と云えます。

(村岡という地名が昔の姿を現わすと云うことにでもなれば、益々貴重な地名と云えます。)